

## 雨の日ぐらし

ち、ち、ち、ち、と、もののせはしく  
刻む音……

河岸のそば、  
薔の香のしめりも暗し、

かくてあな暮れてもゆくか、  
驛遞の局の長壁  
灰色に、暗きうれひに、  
おとつひも、昨日も、今日も。

さあれ、なほ薫りのこれる  
一列の紅き花鬘粟  
かたかげの草に濡れつつ、  
うちしめり浮きもいでぬる。

雨はまたくらく、あかるく、  
やはらかきゆめの曲節……

ち、ち、ち、ち、と絶えずせはしく  
刻む音……

角窓の  
玻璃のくらみを  
死の報知ひまなく打電てる。

さてあればそこはかたなく  
出でもゆく  
薄ぐらき思のやから  
その歩行夜にか入るらむ。

しばらくは  
事もなし。  
かかる日の雨の日ぐらし。

ち、ち、ち、ち、ち、ち、  
刻む音……

さもあれや、

雨はまたゆるにしとすと  
暮れもゆくゆめの曲節……

いづこにか鈴の音しつと、  
近く、

はた、遠のく軋、  
待ちあぐむ郵便馬車の  
旗の色見えも来なくに、  
うち曇る馬の遠嘶。

さあれ、ふと

夕日さしそふ。  
瞬間の夕日さしそふ。

あなあはれ、

あなあはれ、  
泣き入りぬ罌粟のひとつら、  
最終に燃えてもちりぬ。

日の光かすかに消ゆる。

ち、ち、ち、ち、ち、ち、  
刻む音……  
雨の曲節……

ものなべて、

ものなべて、  
さは入らむ、暗き愁に。

あはれ、また、出でゆきし思のやから  
歸り来なくに。

ち、ち、ち、ち、ち、ち、  
刻む音……  
雨の曲節……

灰色の局は夜に入る。

「やぶちゃん注…私の好きな半翅（カメムシ）目同翅（ヨコバイ）亜目セミ上科セミ科セミ亜科ホンヒグラシ族ヒグラシ属ヒグラシ *Tama japonensis* の詩。私はもう楽曲を聴くことが殆んどない。作業しながら聴くのは専ら——亡きアリスと散歩しながら聴いた——それだ。例えば——YouTube の TOMOKI Nature Sounds & Landscapes の【睡眠用 BGM】ひぐら

しの鳴き声と川のせせらぎ」——

「驛遞の局」郵便局。

「死の報知ひまなく打電てる」電話による電報が開始されるのは明治二三（一八九〇）年で、それまでは郵便局で電報を扱っていたから、これは、或いは白秋の記憶の幼少期の記憶に基づくとすれば（彼は明治一八（一八八五）年一月二十五日生まれ）、この電報を打っている場所はやはり同じ「駅遞局」であると考えてよいと私は思う。但し、これは言わずもがな、実際の訃報電報の打電音ではなく、ヒグラシの音を不吉なそれにオノマトペイアとしたもの。その気持ちはひどく判る。」